

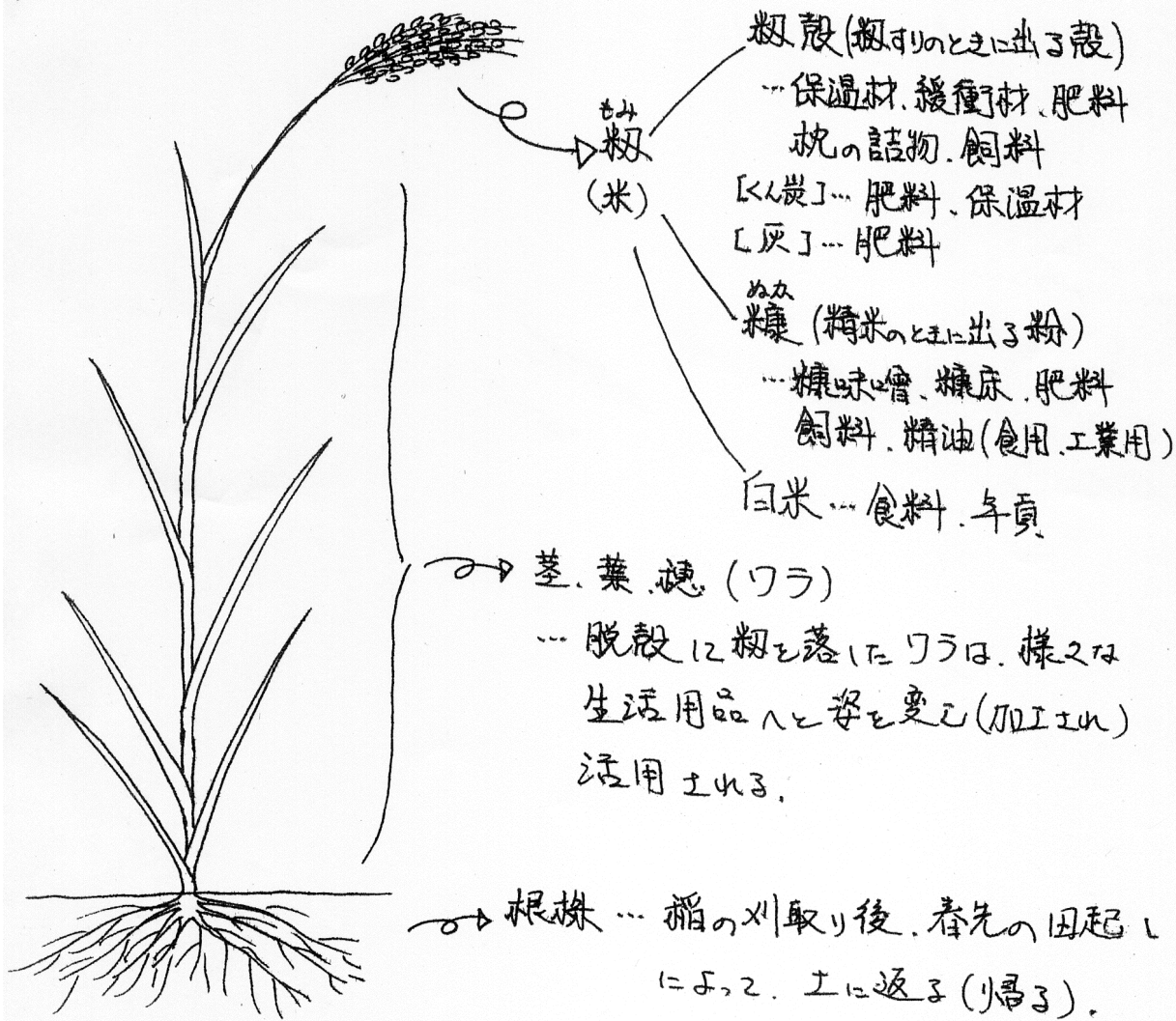
第二の米・ワラ



みご筆。ワラの先端部には、「みご」と呼ばれる強靱な組織がついている。みご筆は、その部分を茎から抜き、束ねたものである。祭りに用いる幟(のぼり)や旗などに墨書する際には、このみご筆が用いられる。神を迎える祭りには、神が育ててくれた稲の組織を使って、書をしたためるのが習いとなったのであろうか。祭りとみご筆との連関は、稲と神との結びつきと、無縁であったのではない。稲・米が神の授かりものであったように、日本人にとっては、ワラも神からの授かりものであったのである。各地で「ワラは第二の米」といわれることが、それを証明している。

稲の利用

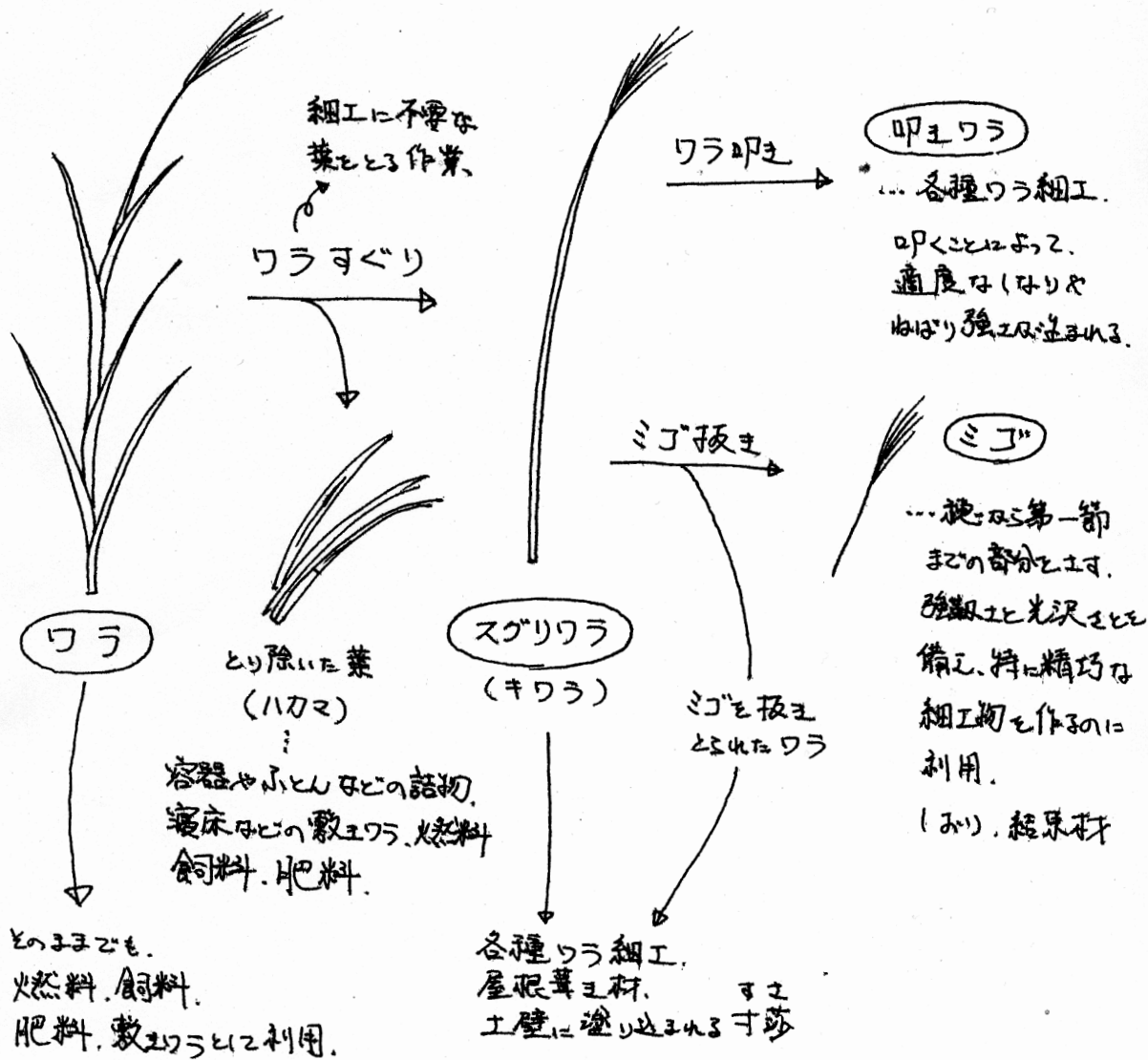
稲があれば、食料が採れ、ワラという貴重な素材が得られる。ワラの前に、稲そのものがとても無駄なく使われていた。確かに、これほど有効利用できる代物はほかにみることはないであろう。



いずれにせよ、最終的には肥やし (肥料) となり、土に返る (帰す) 仕組みとなっている。

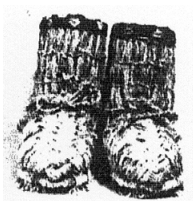
ワラの利用

ワラの利用が盛んになるにつれて、ワラの利用を前提とした収穫が行われるようになり、その保存にあたっての様々な乾燥方法（風景）が生まれ、発達していった。また、歴史の中で行われてきたよい米をとるための品種改良は、同時によいワラをとるための品種改良でもあったと考えられる。



使い古したワラは、堆肥や燃料（灰）となって土に返っていく。
ワラはとても大事に無駄なく使われていた。

わら道具類



くつ



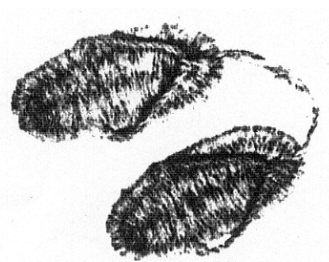
おひつうれ



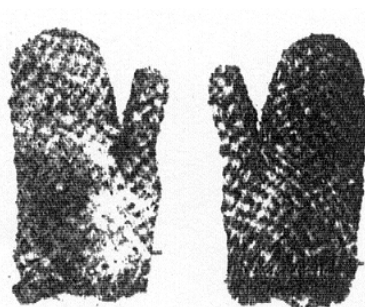
しめ縄



わら人形(亀)



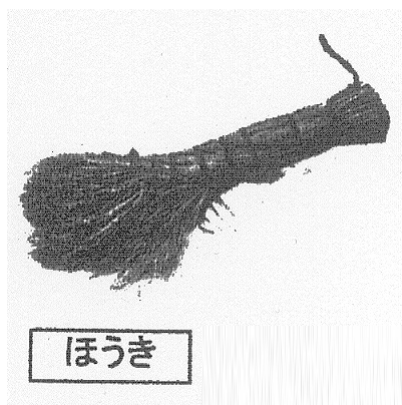
ぞうり



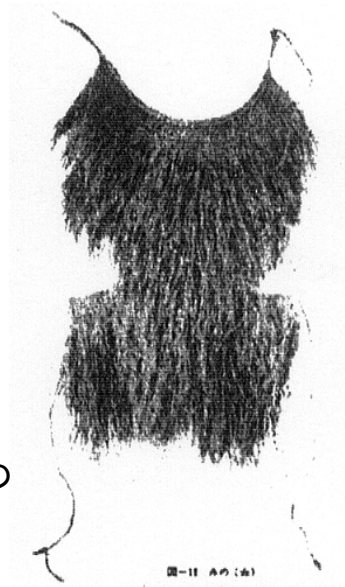
手袋



ねこちぐら



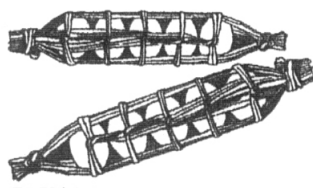
ほうき



みの

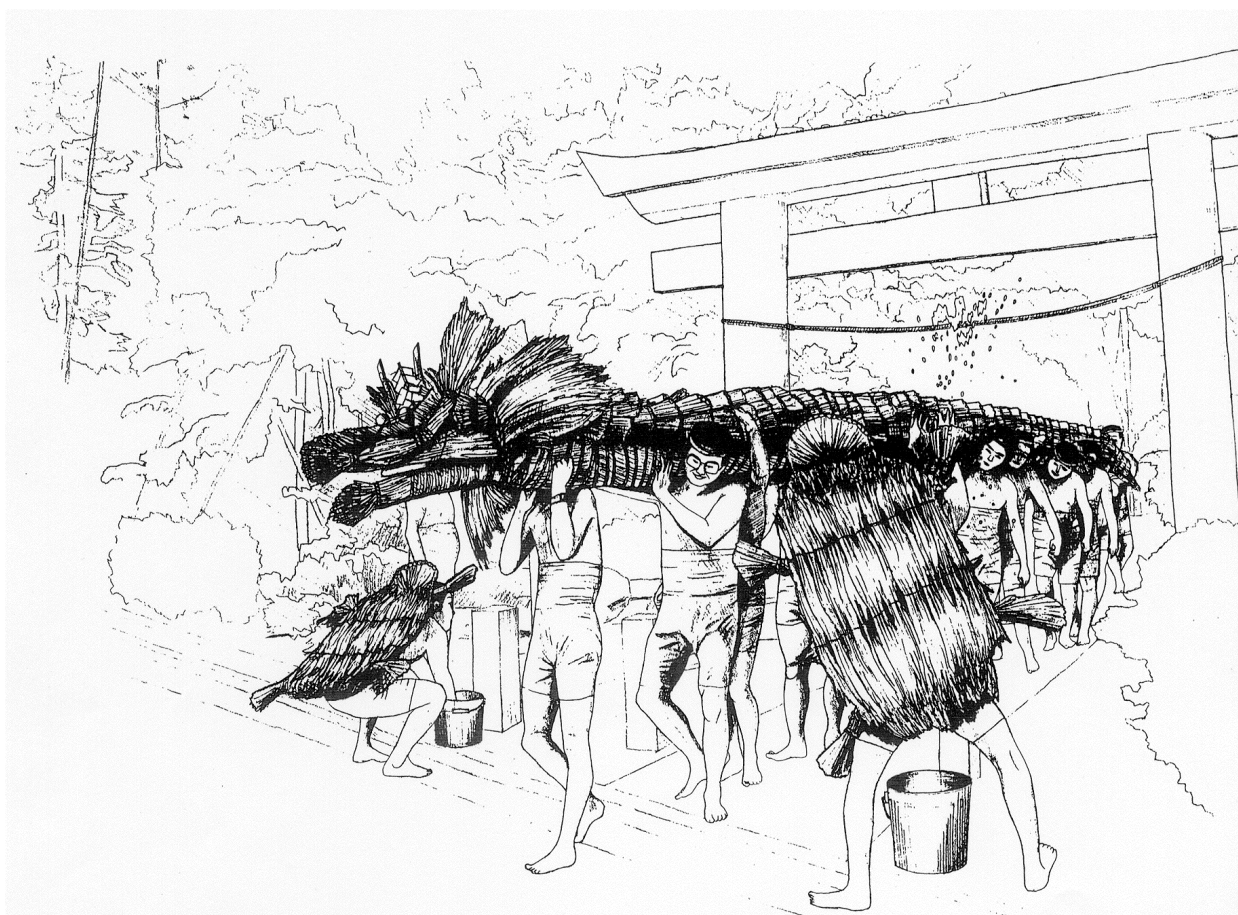


わら人形(亀)



卵のパッケージ

卵のパッケージ



雨乞い竜をかつぎ春日神社参道より村内を巡って多摩川へ向かう

宮内では、夏場、雨が20日間も降らない日があった。その時、大地主の人たちが相談をして雨乞い行事を行うことにした。ホラ貝を吹いて、各組のジョウズカイ(当番)を集めて、その実施を知らせた。各家では、屋根替用などのために持っていた稲ワラや麦ワラを春日神社に持ち帰り、ジャ(大蛇)

などをつくった。つくった大蛇は若衆30人ほどで担ぎ、雷・蛙・オタマジャクシは子供達が担いだ。大蛇は、途中、堀の泥水などを掛けられたりして多摩川へ着く。願いがかなうと、雨降り正月といって、村中が仕事を休み、労をねぎらった。大正時代まで行われていた村総出の行事であった。

稲作の発達 = ワラの発達 → ワラの文化の発展へとつながる

ワラの利用は、衣、食、住だけにとどまらず、生業、運搬、祝い、祭りや遊びなど、年間（一生）を通した生活の中に、より密接なつながりを持ちながら、ワラの文化として展開されていった。人々は、ワラの中で生まれ育ち、ワラの中で彼岸に送られ、この世に迎えられたのである。

そういったワラの文化、特にモノづくりに関しては、ワラ（稲）の入ってくる以前からあった文化の上に成り立っている。それはワラ以外の草木（蔓や皮など）を様々な生活用具に活用していた。稲作が始まり、ワラというとても便利な副産物が身近に手に入るようになってから、ワラが人の生活習慣の中に取り込まれていったのであろう。

ワラの文化は手作りの文化である。ワラで作られるモノは、そのほとんどが特別な道具や機械を使うことなく、人々の手によって作られ、伝えられていった。ワラすぐり、打ち、緬い、組み、編み、織り、束ねなど、家族で、時には集落の人々が集まってワラ仕事が行われた。そんな人々の集いの中でワラのモノ作りは、年配の者から若者や子どもたちへと伝承されていった。

人々のワラに対する態度はとても厳しいものがあつた。ワラ1本も無駄にしないよう、お米の親である「ワラ」の大切さは大人から子どもたちへと教えられた。使い古されたワラ製品は、寿命がくると燃料や堆肥に転用された。直せば使えるものは、そのほころびを修復して利用した。「ゴミ」として捨てて扱われることのなかったワラが生活の基盤となっていた時代は、とても無駄のない、実にエコロジカルな循環的で自己完結的なシステムだったのであろう。

参考資料

- ・「図説 藁の文化」 宮崎 清 法政大学出版局
- ・日本環境教育フォーラム 清里ミナソグ 分科会資料 オクビレッジ
- ・川崎の民俗 川崎市民ミュージアム